



Title	韓国の郊外住宅地における居住者の緑環境評価に関する研究
Author(s)	金, 永敏
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44991
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 金 永 敏

博士の専攻分野の名称 博 士 (工 学)

学 位 記 番 号 第 18755 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 16 年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

工学研究科環境工学専攻

学 位 論 文 名 韓国の郊外住宅地における居住者の緑環境評価に関する研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 鳴海 邦碩

(副査)

教 授 桑野 園子 助教授 澤木 昌典

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、韓国ソウル首都圏の大規模ニュータウンの一つである一山新都市とその周辺にある 4 カ所の田園孤立型団地を対象として、居住者の伝統的自然観や自然景観に対する意識、住宅地内外の緑環境の利用実態とその評価などを明らかにすることで、今後の韓国における自然と調和した持続可能な郊外住宅地開発の方向性と、それを実現する緑環境整備手法について考察したものであり、内容は本編 6 章ならびに序章と終章とからなる。

序章では、研究の背景と目的について述べ、さらに関連する既往の研究について整理・考察して研究の位置づけを行った上で、研究で用いる用語の概念規定をしている。

第 1 章では、ソウル首都圏におけるこれまでの郊外住宅地開発について、ニュータウン開発の特徴や意義および田園孤立型団地開発の特徴と問題点を整理するとともに、郊外地域での今後の市街地形成に関する政府や自治体の政策について整理している。

第 2 章では、第 3 章以降で調査対象としているニュータウン（一山新都市）と周辺の 4 カ所の田園孤立型団地について、文献調査と現地調査を通じて空間的概要と緑環境の特徴を整理し、一山新都市は緑地率が高いものの一部を除いて自然林が残存していないこと、田園孤立型団地は都市施設が不十分であるが田園や自然林に隣接しているなどの特徴について論じている。

第 3 章では、韓国人の伝統的自然観や自然景観に関する考え方を文献から抽出した上で、それらに対する一山新都市および田園孤立型団地居住者への意識調査を通じて、伝統的な自然観や自然景観に関する考え方が現代の郊外居住者の意識の中に継承されていることを論じている。

第 4 章では、一山新都市の公園緑地について、居住者に対する利用実態調査と意識調査および公園利用者に対する聞き取り調査を通じて、ニュータウン内にある種々のタイプの公園に関する空間評価や居住者・利用者の空間要求を明らかにし、今後の緑環境整備の方向性について考察している。

第 5 章では、一山新都市内の未利用敷地に見られる菜園利用について、利用者に対する聞き取り調査を通じ、利用実態および利用する理由や意義などの利用者意識を分析して、今後のニュータウン開発における計画的な菜園整備の可能性を考察している。

第 6 章では、田園孤立型団地の居住者に対するアンケート調査を通じ、団地内外の緑環境の利用実態や空間評価を明らかにし、周辺の田園環境を考慮した今後の郊外住宅地整備の方向性について考察している。

終章では、以上の分析・考察結果をとりまとめ、韓国の郊外住宅地における居住者の緑環境評価の特徴と、今後の郊外住宅地開発の方向性および緑環境整備の手法について考察・提案している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、韓国ソウル首都圏郊外の住宅地開発の代表的なタイプであるニュータウンと田園孤立型団地について、その緑環境に着目して、利用実態調査および居住者や利用者に対する意識調査に基づき、住宅地の空間評価やそれに対する空間要求およびその背後にある意識を分析したもので、それらを通じて今後の自然と調和し持続可能性をもった郊外住宅地形成のための知見をまとめたものである。得られた結果を要約すると、以下のとおりである。

(1) 韓国の郊外居住者が伝統的な景観形式である借景に相当する住宅外部の自然景観の眺望を重視していること明らかにし、さらにありのままの自然景観、風水思想に基づく背山を有する住宅立地、周辺地形と調和する住宅への志向など、郊外居住者に韓国の伝統的な自然観が継承されていることを明らかにしており、居住者がそうした自然観に合致する居住環境志向を有していることを示唆している。

(2) 郊外での居住地選択に際して居住者が自然環境の豊かさを重要視していたこと、居住開始後も住宅地周辺の自然景観や自然環境との親しみを重視していることを明らかにしており、韓国政府の国土開発計画の基本目標である「自然との調和」に則した開発形態が今後の郊外住宅地開発の進むべき方向であることを裏付けている。

(3) 住宅地内の緑環境に関する居住者の評価については、ニュータウンにおける人工的な湖水公園と自然林保全型の公園の2つの大規模公園では、これらの異なる空間特性を利用者が利用要求や自然環境への要求に応じて使い分けられていること、また湖水公園と近隣生活圏近隣公園については樹木の少なさが不評であり自然林などの自然的な空間要素に対する居住者の要求が強いことを明らかにしている。

(4) 公園緑地の造園手法について、郊外居住者には休憩や軽度のスポーツを行う公園緑地などでイギリス風景式造園手法に沿った人工的緑地への嗜好が存在することを明らかにする一方で、既存の自然林の保全や自然林のような緑地の造成への要望がより強いことを明らかにしており、韓国の自然林形成型の伝統的な造園手法である園林の手法を用いた整備が有効であることを示唆している。

(5) 居住者による未利用敷地の菜園利用は一般の居住者には肯定的に受け止められており、土地所有者からの制約や問題発生がないことを明らかにし、今後の環境調和型住宅団地の整備において、屋外空間利用形態の一つとして菜園利用に対応した空間整備を計画段階から盛り込んでいくことの必要性を示唆している。

(6) 以上の知見をふまえて、郊外住宅地の立地選定や居住環境整備の方向性として、韓国人の伝統的な自然観が継承されていることの認識に基づき、周辺の自然環境ならびに自然景観の保全の必要性、大規模公園から近隣公園までのそれぞれの公園緑地タイプに対応した環境整備手法、小生活圏ごとの菜園の計画的整備などを提案している。

以上のように、本論文は、韓国ソウル都市圏郊外の住宅地について、その緑環境に着目し、居住者の利用実態調査および意識調査分析を通じて、種々の緑環境についての空間評価と空間要求を明らかにした上で、今後の郊外住宅地開発の計画立案・整備において考慮すべき諸点について考察し、さらに自然環境を保全活用した環境調和型の開発が現在も継承されている韓国人の伝統的自然観に合致したものであることを認識した上で、その実現のための提案を行っており、環境工学の発展に寄与すること大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。